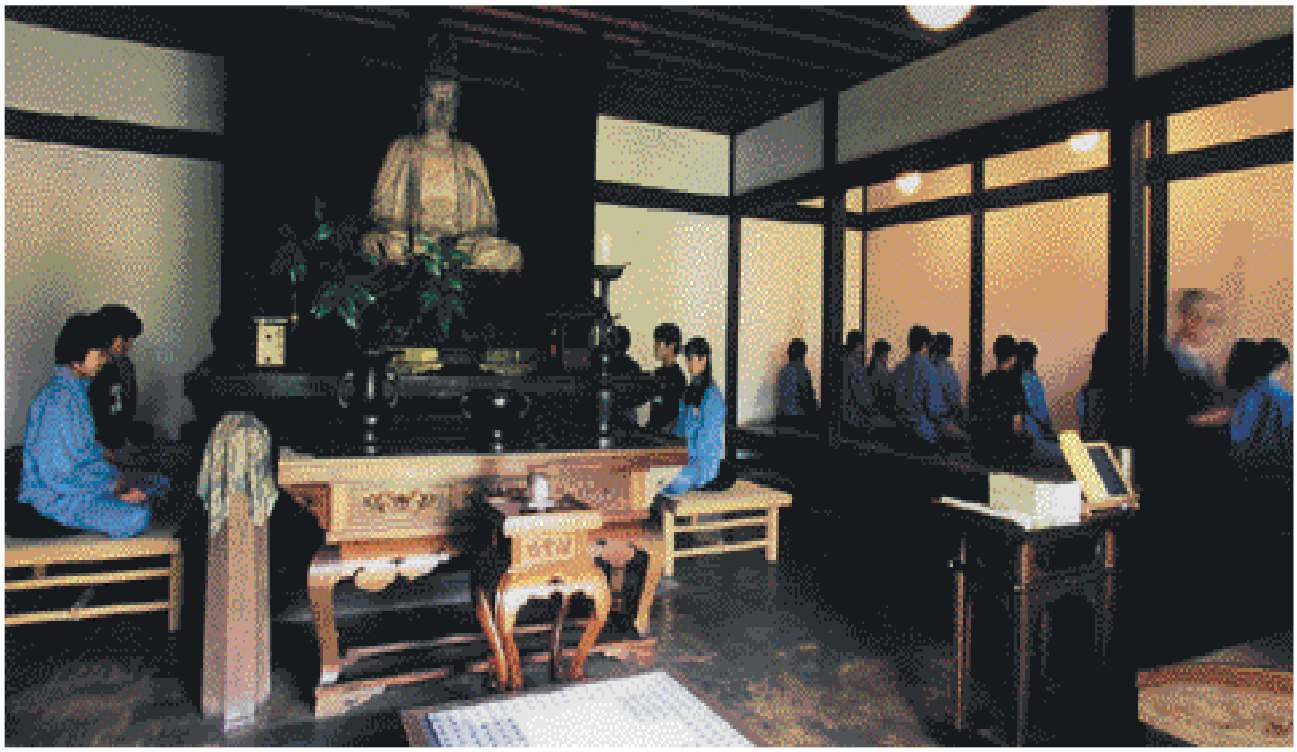
寺紋
柊（ひいらぎ） かこみ沢瀉（おもだか）
（通称 大関沢瀉（おおぜきおもだか））

大雄寺報

＝第４号＝
平成17年１月１日発行
発行所 黒羽山 大雄寺
〒324-0233
栃木県那須郡黒羽町田町450
ＴＥＬ 0287－54－0332
ＦＡＸ 0287－54－0330
編集発行人 住職 倉澤良裕
印刷所 タキザワ印刷

釈迦如来坐像（坐禅堂内・県文化財指定）

私たち日々の信仰生活は、
「体を真っ直ぐにして、まっすぐな心を保って正直に生きることです。」
「毎朝ご仏壇の前に姿勢を正しく座り、合掌と仏さまとの直線上にまっすぐに線香を立てて、毎朝２分でも３分でもご先祖様にお参りすることを実行することです。」
私たちの生命（いのち）は、仏さまご先祖さまからいただいた尊い生命（いのち）です。ご先祖さまへの報恩感謝の日暮しなのですから。
道元禅師さまは、「只管打坐（しかんたざ）」といって、ただ坐るということを伝えました。ただ坐るということは、「打成一片（だじょういっぺん）」といって、一つになること。そのものと一つになるということです。体と心が一つになること。それが坐禅です。
正身端坐（しょうんたんざ）すれば体が真っ直ぐになります。
体が真っ直ぐになれば心が真っ直ぐになる。心が真っ直ぐになったならば思うことが真っ直ぐになる。
「毎月第二と第四日曜日午前７時30分から坐禅会を開催しています。是非ご参加ください。」



坐禅風景

集古館落慶式典円成

平成十六年六月八日

平成十六年六月八日集古館落慶式典が挙行されました。

住職からの謝辞を申し上げます。

積年の念願でありました宝物収蔵庫「大雄寺集古館」が皆様方の絶大なるご支援とご協力をいただき、この程無事完成し、本日目出度く落慶式典を執り行うこととなりました。

此れ一重に仏天のご加護と檀信徒の皆様及び建設関係の方々のご尽力によるものと深く感謝申し上げる次第であります。

大雄寺の歴史を振り返ってみますと、応永十一年（一四〇四年）に創建され、今より六〇〇年前のことですが、永い歴史の中で黒羽藩主大関氏と大雄寺歴代住職との関わりから多くの宝物を保存してきました。しかし、今まで殆んど一般公開がされず、粗末な状態で保存されてきました。

適正かつ安全な格納と公開を可能にした宝物収蔵庫「集古館」は、大雄寺の歴史・黒羽の歴史を広く紹介し、子々孫々永く伝えていく重要な施設となるわけであります。

只今「黒羽藩主大関氏と大雄寺」のテーマのもとで宝物の公開を行っておりますが、今後いろいろなテーマの下で宝物の公開を実施していきたいと存じます。また、この集古館は、皆様がお持ちになっている貴重な資料や宝物の寄託を可能にするものでもありますので、ご遠慮なくご相談いただきたいと思います。

また、集古館前には「屋外トイレ（禅寺ではトイレのことを東司（とうす）と言う）」が建設されました。集古館落慶と合わせて東司落慶の運びとなりましたことにお祝いを申し上げます。この東司建設につきましては、宗教法人大雄寺からの捻出であります。現在町下水道工事が完成しておりませんので、使用できませんが、今年の秋頃には使用できる予定であります。この屋外トイレは、お年寄りや障害者にやさしいバリアフリーを施したトイレであります。どうぞご参拝、墓参の折お使いください。

このような七堂伽藍が整った大切な文化遺産、恵まれた自然環境にある寺院として、私たちの菩提寺「大雄寺」を守り発展に皆様と共に力を注いでまいりたいと念じております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

本日はご多用の中、集古館落慶式典にご出席いただき誠にありがとうございました。

合　掌

平成十六年六月八日

大雄寺三十七代　倉澤　良裕

集古館寺宝展示にあたって

大竹　政行

大雄寺集古館の発足にあたって寺宝運営委員会の委員を委嘱され、委員一同で白河市の集古苑を見学して参りました。大きな建物の中に様々な古文書等が陳列してあり、陳列品の説明は専門的で詳しく難解な点もありましたが、たいへん参考になりました。

集古館の完成と同時に、大雄寺の寺宝整理が行われ、本堂に集められた、書画、什器、佛像、武具類を慎重に集古館二階に搬入格納いたしましたが、その際、個別に作者や寸法等を綿密に計り、写真をとり、番号をつけて目録を作りました。中には県文化財指定のものもあります。集古館の建物は、特に火災、室内照明、湿度、温度調整等には、細心の注意が沸はれております。寺宝展示に当っては文星大学の関口先生、町の学芸員新井敦史先生の懇切なご指導をいただき、開館特別記念展が平成十六年四月十八日から開催され、私も委員の一人として、不慣れながら交替制で開館日には、来観者の案内をいたしましたが、展示品は、年に何回か替えて展示することになっております。

現在、展示されているものの一部をご紹介しますと、黒羽城郭図、大関高増画像、救世大師像、山寺日昏（石川寒巌画）、大関増裕公写真、「衽金革」扁額写真、枕返し幽霊掛軸、歴代藩主大関家と大雄寺住職系譜一覧表等があります。開館日には大関家末裔の大関和雄翁がお見えになり、一同と記念写真をとりました。来観者は檀家の方、黒羽近辺の方、先祖が黒羽出身の子孫の方、歴史研究家、愛好家等多彩です。特に足をとめ関心を示されるのは黒羽城郭図、大関増裕公と幕閣の写真、枕返しの幽霊図などが見うけられます。また、来観者が皆おどろき感嘆されるのは、静寂な山の上に巌として建っている茅葺きの本堂をはじめ七堂伽藍の幽玄さと壮大さのようです。

これだけのお寺と寺宝を火災から守り散逸することなく保存してこられた歴代住職のお骨折は、まことに大変なことだったと思います。茲に立派な集古館が完成し、寺宝を安全に収納展示し得たことは、一重に現住職良裕様の御努力と檀家の方々の御尽力によるも

のと存じます。

来観者の中には、歴史に詳しい方の質問などもありますので私ももっと研究して知識を深めなければと思います。これからも多くの方々に集古館に来ていただき寺宝を見ていただくよう願っております。

黒羽城郭図

鈴木　貢四郎

縦二メートル横三メートル程の大きな黒羽城郭図が展示されています。入館者がいない時には何時もこれを眺めていました。

誰が何時描いたのかは判明しないそうですが、本丸付近、北城お堀の様子、町並の様子、神社仏閣、松、桜等の木々を克明に描いています。しかし侍屋敷は区画だけでその中に一字「侍」だけ。これも何か意味があるのでしょうか。昨今で言う情報管理だったのでしょうか。

町屋の様子は一軒一軒丁寧に描いています。向上町四丁拾七間、向下町三丁五十間、田町河原四丁、前田町四丁四十間等と道路に書かれています。

当時ここに住んでいた侍達、町民達は、どんな暮らしぶりだったでしょうか。この絵図を見ながら色々と想像しながら楽しませてもらいました。

城郭を囲んで西下には那珂川が、東下には松葉川が流れ山城として良い地形の場所を選んだものと感心しました。

絵図の四隅には遠方への道程が書いてあり、これも大変興味をそそりました。

右上には「八里百村、八里板室、弐十五里若松、弐里拾丁鍋掛」左上には「弐里五丁中田原、七里五丁川崎、拾五里日光、七里五丁和泉、拾弐里八丁塩原」「拾弐里宇都宮、弐里拾丁福原、六里七丁喜連川、三里九丁佐久山」「七里烏山、拾三里九丁益子、弐里拾五丁佐久山、弐拾里水戸、五里武茂」

右下には「六拾三里仙台、弐拾三里岩城、拾壱里半棚倉、五里関明神、七里廿弐丁白川」等と黒羽からのそれぞれの土地への道程が書かれています。

現在の那珂橋付近の当たりに二艘の舟が描かれています。この舟は田町と向町をつなぐ渡し舟と思われます。未だ舟橋が無かった事が分かります。舟橋が出来たのは天保六年（一八三五）だそうですからそれより以前にこの絵は描かれたのではないでしょうか。

小泉斐が天保八年（一八三七）に描いた「黒羽城絵図」に舟橋が描かれています。

この絵が描かれた年代、筆者が判明しないのが惜しまれます。

黒　羽　城　郭　図

ぼたんコンサート

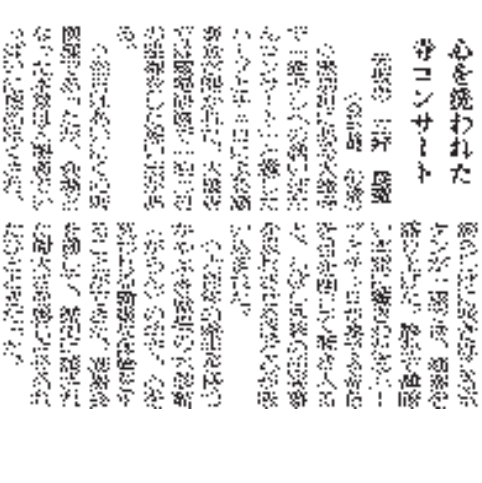
「ぼたんコンサート」に招かれて

名刹大雄寺「ぼたんコンサート」に御案内を戴き参上。その折九十三才の老人である私は、椅子の用意されている本堂後方に席をとらせて戴いた。当山本堂の大広間は流石に大きい。その本堂が来客で一杯である。文字通り「立錐の余地なし」の盛況である。

奏者二名、東京芸大、東京音大の出身で国内は勿論、国外に於いてもご活躍中の若手女性の方々であった。本堂大広間一杯の聴衆は静まり返って静寂に満ちていた。咳一つない聴衆は云うまでもなく深い感銘を受けながら、ハープとチェロの音色に心を奪われているに違いない。

本堂前庭の「ぼたん」は小雨のけぶる中に大きな花びらを雨に打たせ乍ら只管咲き誇っていた。

元学校法人
矢板中央高等学校理事長　故 伊藤 義輝 先生



★板絵十六羅漢図
（黒羽町文化財指定）

作者　小泉　斐
制作期　1809 年（文化 6 年）
本堂内の部屋に掲げられた板絵十六枚の羅漢図である。
羅漢とは、正確には阿羅漢といって、インドの言葉で「アルハン」というのを音写した語である。これを訳して「応供」（供養を受けるに相応しい人）という。仏弟子として最高の覚りの境地を体得した人を阿羅漢と尊称した。特にすぐれた十六人の弟子を十六羅漢という。

★おびんずる尊者

十六羅漢の中で「びんずる尊者」や「チューダ・パンタカ尊者」がよく知られている。
びんずる尊者は、「なでぼとけ」の別称で善男善女の信仰を集める仏さまである。昔からおびんずる様の体を触ってその手で自分の体を撫でると、病気が治り、頭もよくなり、節々の痛みも軽くなるといわれ深い信仰を集めている。
それ故、びんずる尊者の安置されるところは本堂前などである。大雄寺も本堂前土間廻廊に祀られている。

この度檀信徒の方から「びんずる尊像」修理のご寄付の申し出でがあり、解体と漆塗りの補修を進めている。
修理を進める中で次のことが判明した。

- ●大雄寺 13 世廓門貫徹大和尚（1693・元禄 3 年～1703 元禄 16 年）の払子（ホッス・法要に使用する仏具）の髪の毛（信者の髪で作られたであろう払子の毛）が尊像の体内に納められていた。
- ●「明和 4 年（1767 年）8 月再興　大雄寺 2 4 世悦外代・施主賢隆」と記す書状が体内より発見された。
  大雄寺 24 世悦外元立大和尚（1766・明和 3 年～1791・寛政 3 年）が住職の時。
- ●「享和 3 年（1803 年）2 月　大仏師職高田運応 88 歳　同運平 36 歳」と記す書状が体内より発見された。
  大雄寺 25 世格外元機大和尚（1791・寛政 3 年～1815・文化 12 年）が住職の時。
  25 世格外元機大和尚在職中には、
  1．1797 年（寛政 9 年）経蔵再興。
  2．1801 年（享和元年）黒羽家中屋舗絵図。
  3．1803 年（享和 3 年）経蔵内輪蔵蓮華台刻字あり輪蔵再興。
  4．本堂内板絵十六羅漢図（1809 年・文化 6 年　小泉斐作）などがある。
- ●「安政 6 年（1859 年）6 月再建立」と台座に記入あり。

★扁額「衽　金　革」

「キンカクヲシトネトス」と読む。
大関家第 30 代増式 1856 年（安政 3 年）～1860 年（万延元年）の書
もともと黒羽城門にあったが、現在は、大雄寺本堂廊下上に掲げてある。
刀や鎧などをいつでも身にまとっている状態を意味し、いつ敵が攻めて来ても油断はしていないという武士の心構えを意味する言葉である。

「衽金革〈キンカクヲシトネトス〉」

★枕返しの幽霊　伝説

"枕返しの幽霊の間"　に
泊まった旅人の恐怖

江戸時代中期のことという。

ひとりの旅人が、真っ暗な夜道を急いでいた。

男は紙の行商人。障子紙の産地として知られる茨城の大子から八溝山地を越えて、栃木方面へ向かったが、黒羽の城下町で日が暮れてしまった。「あそこの山の上に大きなお寺さんがありますよ」

土地の者に教えられ、杉の木の下闇に白々と浮かび上がる石段をどこまでも登っていくと、大きな本堂のかたわらに、ポツリと明かりがひとつ。「ごめんください。旅の者ですが、一夜の宿をお願いします」

住職の案内で一間に通された旅人は、荷物を枕元に置くとまもなく、旅の疲れでウトウト眠り込んでしまった。

その夜更け。悪夢にうなされ、ハッと目覚めた旅人が枕元を見ると、たしかに置いたはずの大事な荷物がない。あわてて布団から飛び起きる。なぜか荷物は、足元の側にあった。（だれか部屋に入ったのか？）

不審に思い、寝ぼけ眼をこすって周囲を見まわすと・・・・・・・・灯火を落とした部屋の一隅に、ぼうっと浮かび上がる無気味な姿！髪をおどろに振り乱した面長の老婆が、鋭い目をカッと見開き、旅人を睨みつけているのだった。

驚き恐れた旅人は、荷物をひっつかむや一目散に部屋を飛びだし、転げるように石段を駆け下りて麓の民家にたどりついた。

「夜中にどうしなすったね」

「あそこのお寺で、ゆ、幽霊が・・・・・・」

「さては、おまえさん、"枕返しの幽霊の間"に泊められたね。あのお寺には幽霊の掛け軸があってね、その絵が掛けられている部屋で寝ると、必ず怪しいことが起こるそうな・・・・・」

★大雄寺役員記念写真（寄進：新江　彰氏）

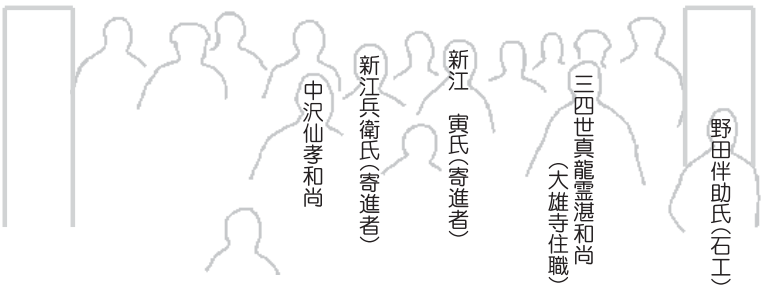
（明治 45 年・1912 年）今から 93 年前

本堂前で撮影された当時（明治 45 年 4 月 20 日）の役員集合写真である。百年も前から牡丹が植栽されていたことがわかる。今よりも大きな枝振りである。

★山道門柱工事写真（寄進：新江　彰氏）

（昭和３年・1928 年11月）今から 93 年前

山道入り口に建つ門柱の設置工事の様子である。昭和 3 年 11 月　寄進者新江　寅氏、新江兵衛氏、大雄寺住職は第 34 世真龍霊湛大和尚である。この門柱は現在も同じ場所に建っている。



私たちの曹洞宗

ご本尊さま

私たち曹洞宗のご本尊さまは、仏教の開祖である釈迦牟尼仏（お釈迦さま）です。お釈迦さまは、私たちの尊い生命をどのように生きればよいのかをお示しくださいました。

お仏壇に「一仏両祖」のお絵像をお掛けする場合は中央にお掛けします。「一仏両祖」とは、本尊のお釈迦さま、大本山永平寺を開かれた高祖道元禅師さま、大本山総持寺を開かれた太祖瑩山禅師さまのことです。朝食前にご飯やお水を供え「一仏両祖」におまいりしましょう。

道元禅師さま

鎌倉時代の一二〇〇年に京都で生まれ、後二十四歳のとき中国（宋代）に渡り天童寺の如浄禅師の法を嗣いで帰国されました。帰国後は、日本で初めて坐禅を中心に修行できる道場、興聖寺を開創されました。その後四十四歳で越前に移られ永平寺を創建し、坐禅修行を根本とした仏法を説き示しました。

道元禅師さまの教えは、閑静な生活環境を整え、自分をしっかりと見つめ迷いのない人生をおくることです。慈悲の心を育み、あらゆるものとつながりをもって暮らしましょう。

瑩山禅師さま

鎌倉時代の一二六四年に越前で生まれました。八歳で永平寺に上り、十三歳で出家し、永平寺三代目にあたる徹通義介禅師さまに師事しました。二十二歳のとき加賀の大乗寺に入り、二十八歳で義介禅師さまの法を嗣ぎ、道元禅師さまから四代目を継承しました。一三二一年には、能登に諸嶽山総持寺を開かれました。

瑩山禅師さまは、「仏心とは大慈悲心なり」と人々にあまねく慈悲の心をめぐらし、おしみなく徳をほどこすことを説き示しました。仏さまの心を大事にして仏道にかなった日常生活をおくりましょう。

行持報恩

曹洞宗には「孝順心」という言葉があります。これは道元禅師と二代目を受け継いだ懐奘禅師のお話から出た言葉です。

懐奘禅師は、道元禅師に二十数年間影のようにつき、したがいました。また、道元禅師が亡くなられてからは、八十三歳で亡くなられるまで、道元禅師の生前と同じように朝起きてから夜休むまで、つきしたがったそうです。この禅師の浄行は「孝順心」として伝えられてきました。曹洞宗では、常に孝順の心を忘れることなく生きよ、というのが毎日のお努めの姿勢です。

そこで、お勤めについて考えてみましょう。お勤めにはいろいろありますが、何といっても基本は勤行です。お仏壇に向い、朝でも夜でもお勤めを行うことは、心が静まり尊い善行でもあります。そこで、大切なことは、お経を唱えることは当然のこととして、毎日、お水、お茶、お香、ご飯などを、かかさずお供えすることです。

この供える供養には三つの心があります。一つには「利」の供養です。つまり、形があり目に見えるものを供えることです。

次に「敬」の供養で、目に見えないもの。すなわち「まごころ」の供養をいいます。

最後が「行」の供養です。日々の生活をささげます。これは、そう簡単に出来ることではありません。難しいことです。

いずれにしても、この三つの供養の「まこと」をささげることが大切であります。そして、ありきたりの言葉ですが「まごころ」をこめて心からお勤めすることです。心のかよわない供養は「空念仏」にすぎません。

行持とは日常生活のこと、報恩とは感謝の気持ちです。毎日の日おくりをいつも心を清浄にして、感謝の気持ちで過し信仰を持ったくらしを送りたいものです。

おしえ

修証義をよりどころとして教えについて考えてみましょう。

修証義は、道元禅師の著書「正法眼蔵」の中より、そのお言葉を選び出し、多くの人々に曹洞宗の教えを分り易く説き示すために、明治の中ごろ完成されたものです。

全部で五章三十一節に分れており、そのうち、懺悔滅罪・受戒入位・発願利生・行持報恩の四つの実践内容（四大綱領）を曹洞宗の教えの標準としています。

わたしたちは仏のみ子であり、お釈迦さまと同じ清らかな心（仏の徳）が具わっておりますが、日々仏のみ心にそわない生活をくり返しているのも事実です。わたしたちが真実、仏のみ子であるという確信にめざめたときに深い反省の心が生じ、懺悔せずにはいられなくなります。（懺悔滅罪）

このように懺悔の心がおこり、仏さまに向かって懺悔の儀式を行ったとき、ただちに仏さまの徳があらわれて、仏さまの戒法を受けることができます。（受戒入位）

毎日の生活が自ら正しく、明るい生きがいを感ぜられて、世の中のお役に立つことを願い喜ぶようになります。（発願利生）

個々に合掌の生活、感謝報恩の生活をいとなみ、今に打ちこむことのできる充実した日を送ることができるのです。（行持報恩）

こうした生き方をいただくことが肝要です。

さて、人間が人間らしく生きていくためには、どうすれば良いのでしょうか。それにはまず、あなたがあなた自身を知ることです。私たちは自らが選ぶことのできない生命を頂いて今を生かされています。過去は再びもどってはきませんし、明日のことは分りません。人間に与えられているのは今だけです。そこで私たちは、与えられ、生かされている生命（心）を少しでも豊かにして生きたいものです。

黒羽山大雄寺 三十七世を継承して

黒羽山大雄寺は、室町時代の様式を今に伝える総カヤ葺き屋根の禅寺である。本堂、禅堂、庫裡、総門、経蔵、廻廊、鐘楼からなり、研修道場「月光館」、宝物収蔵庫「集古館」が備えられた寺院である。黒羽余瀬における創建は、１４０４年（応永一一年）。現在の七堂伽藍は、一四四八年（文安五年）に建てられたもので、黒羽藩主第十四代大関高増によって一五七六年（天正四年）現在地に移築された。また、廻廊外の土蔵造りの経蔵は、一七三二年（享保一七年）新造され、一七九七年（寛政九年）の再興された建物である。坐禅研修や各種の講座に使用する月光館は、昭和五十四年に新造。平成十五年に大雄寺寺宝を格納と展示を兼ね備えた集古館が新造された。

静寂の中に佇むカヤ葺き屋根の大伽藍は、圧倒的な存在感で眼の前に迫ってくる。

本堂外六棟は、昭和四四年に栃木県文化財指定を受けている。

私、平成三年大雄寺第三七代を継承し、伽藍の維持と発展、布教教化に日々精進を重ねている。「開かれた寺」をモットーに檀信徒仏事法要、参拝者への法話や案内説明、各種研修会の坐禅指導、学校教育による総合学習や体験学習の児童生徒、教職員対象の坐禅研修などにも力を注いでいる。

★毎月第二と第四日曜日は、午前七時三〇分から日曜坐禅会を行っている。個人で坐禅を希望される方は、この坐禅会に参加できる。一〇年以上も続けている人や初めて坐禅を経験する人など毎回一五名前後参加している。禅堂で四五分間の坐禅、終わって作務、茶話会で終了する。直堂は、長く続けている人が当番で行っている。電話やＥメールで坐禅の問い合わせが多く寄せられる。

一〇名以下の場合は、日曜坐禅会への参加を勧め、一〇名以上の場合は、研修会のスケジュールによる坐禅研修を実施。この研修会日程は、モデルとして法話・坐禅・拝観で所要時間二時間。禅堂四〇名、本堂であれば一五〇名を最大としている。

★大雄寺では、生涯学習的な講座も開催している。毎月第一火曜日は、読経会と写経の会。毎月七の付く日に石仏教室、お地蔵さまや観音さま、らかんさまを彫刻し境内に奉安する。また、外部講師をお願いしてご詠歌教室も開催している。

地域の人たちが気軽に寺に訪れる機会を設け、生きがいを得る場として門戸を開放している。また、社会教育や学校教育の機関から依頼される講演も行なっている。

毎日充実した日々を送り、境内の草取り作務、山道の掃き掃除は心の癒しである。

御詠歌教室

高梨　ゆり子

「濁りなき心の水にすむ月は・・・」と坐禅の御詠歌に始まり二時間程の雑念を忘れて精神修養であり軽い健康体操でもある御詠歌教室に声を出しております。

朝のテレビで前頭葉の活性化を心掛けないと老化が早まると言う話でしたが、この御詠歌は鈴（りん）と鐘（しょう）とお唱えをして三部作で成り立ちますので脳の活性化には最適かとも思います。理屈ではなく声を出して歌うことは気持の良いもので教室を終えたあとは清々しい気分になります。

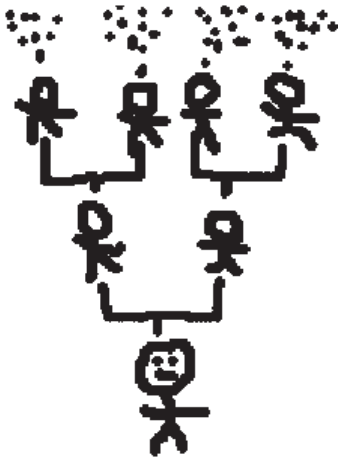
曹洞宗梅花流の御詠歌を大雄寺さんで始めてはや七年程になりますが、教室も充実して齋藤先生のもと教典も大分進んでおります。県大会等に出席致しましてもそれなりに中位におることが出来るようになりました。楽しみながら個々の精進が出来ますことを何より幸せに感じております。仏の道人の道も少しずつ分って参りました。もし皆さんの中に何か趣味を持ちたいとお考えの方は、我が身を律する勉強でもあり声を出す健康法でもある御詠歌教室を是非考えてみて下さい。男女は問いません。私どもは後を続けて下さる方々に教室に入って頂きたいのです。一緒に御詠歌をお唱え致しましょう。お経ではなく人生の哀歓を詩（和讃）に托しそれに美しい曲がつけられて歌う御詠歌はある時は喜びを、或る時は涙を流すというように身近なものでございます。鈴の音も鐘の音も本当に美しいものです。御詠歌を続けられるのを大変有難く幸せに思います。

慶祝の和讃の響く菊目和

一口法話

三三、五五四、四三二人の先祖

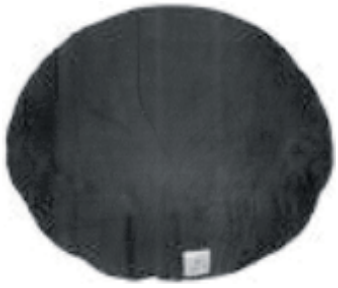
二の二五乗が、三三、五五四、四三二で二五代遡ったご先祖の数です。
私たちは両親から生まれてきました。両親もまたその両親から、一〇代で一、〇二四人（二五歳で子供を授かった場合二五〇年前となり、江戸時代中期）。
二五代で三三、五五四、四三二人（六二五年前、室町時代・・・大雄寺創建頃）となります。
今いただいている生命は、多くのご先祖の生命のバトンで受け継ぎ受け継がれてきました。これらのご先祖のうち一人でもいなければ、私という存在は、この世に存在しないことになります。
ところで駅伝マラソンを思い浮かべて下さい。
駅伝マラソンは、何人かの選手がタスキを受け渡ししながら走るマラソンです。苦しそうにハアハアいいながら走ってきた選手が、次の選手にタスキを渡したときのホッとした顔。そして、タスキを受け取った選手は「こんどは、自分にまかせとけ」という顔をしてタッタッと飛び出していきます。
人生は、あの駅伝マラソンに似ています。タスキは「いのち」ずーと昔から伝えられてきた尊い生命です。
この尊い生命に感謝する行事が、一周忌とか三回忌とかのご法事です。
ご先祖に感謝、これからの人生を力いっぱい走りぬいて、次の人（子孫）にしっかりとタスキを渡すと誓うこと。ご法事の真の意味です。



座蒲団（座布団）

皆様坐禅をしたことありますか？
坐禅は足を組み、背筋を伸ばし、体をまっすぐにして、只管坐（ただひたすら）ることです。
体をまっすぐにするためには、お尻を高くしなければなりません。そのために坐蒲（ざふ）という丸い蒲団を尻にあてます。
坐禅に使う坐蒲、今はパンヤや綿を布袋に入れた丸く黒いクッションですが、昔は蒲という柔らかい草を丸めて尻に当てたようです。だから、坐蒲「ざふ」という字を書きます。
蒲団といえば、寝具のことを指し、座る時に使うものを座蒲団（座布団）と表現しています。元来、蒲団も坐蒲も同じものであったが、座る専用のものを座蒲団（座布団）といい、坐禅専用のものを坐蒲と使い分けているのです。
また、「蒲」の字を「布」と書くようになったのも時代の変遷かもしれません。
毎月第二と第四日曜日、朝七時三〇分から坐禅会を行っています。荒行、苦行、我慢会ではありません。身を調え、息を調え、心を調えることです。皆さんも是非参加してはいかがですか。

坐　禅　風　景



坐　蒲（ざふ）

おかげさま

「お元気ですか」「はい、おかげさまで」という挨拶が交わされると共に安堵する気持ちになれます。意味は「あなたのお力添えで」ということも含まれているでしょうが、もっと深い意味（宗教上の意味）が込められているのです。
つまり、「かげ」とは、神仏やご先祖さまの霊のことを意味しているのです。目には見えないものへの感謝の気持ちが込められる敬虔な祈りからであります。
ちょっと昔のいいお話がありますので紹介します。

「ご飯には仏がござる」

大正時代の頃、ある少年の学校に目では見えないどんな小さいものでも見ることができるという機械（顕微鏡）が届いたそうです。そこで少年は、ご飯粒を学校に持っていくことにしました。
というのは、いつも、おじいちゃんはご飯を残すと『ご飯には仏がござる』とよく言うので、ご飯の中の仏様を見たいと考えたわけです。
すると、先生は「ばかだな、お前のじいちゃん」。確かに「仏」は見えませんでした。
おじいさんは、日頃ものの大切さを教える人で、鍬を粗末に扱えば「鍬には仏がござる」食事を残せば「ご飯には仏がござる」と叱る人だったのです。
心の教育とは、こういうことでしょう。

阿吽（あうん）の呼吸

相撲放送でよく言われる言葉に「両者、阿吽（あうん）の呼吸を合わせて・・・」。両力士、息や心がぴたっと一致することを表現する言葉として使われる。

阿吽とは、寺の山門の左右に安置されている仁王さまのことである。向かって右側は「阿形（あぎょう）仁王」口を大きくカッと開いていて、人間の『誕生』を意味している。左側は「吽形（うんぎょう）仁王」口をキリッと結んで『死』を意味する。

山門に祀られる仁王さまの真意は、山門の阿形から吽形までのわずか三メートル位の距離、私たちの人生長いようでも距離にすればこれ位の長さしかないという訳で「だからこそ、心して充実した生き方をしなさい」という、生き方の戒めが込められている。

また、「阿」は、吐く息のこと。「吽」は、吸う息のことを意味するところから、息を調えて安定した生き方をせよという教訓でもある。

ちなみに、あいうえお五十音が「ア」に始まり「ン」に終わるのも、実は阿吽の仁王さまが起源なのである。

阿　形　仁　王

吽　形　仁　王

享年（行年）（きょうねん）

先ごろＮＨＫテレビで曹洞宗の大本山永平寺が放映されました。永平寺の住職は、一〇四歳になられる宮崎奕保禅師さまですが、お話の中で仏教徒の信仰生活についてたいへんわかりやすくお話をされました。

「体を真っ直ぐにして、まっすぐな心を保って正直に生きることですよ。」

「毎朝ご仏壇の前に姿勢を正しく座り、合掌と仏さまとの直線上にまっすぐに線香を立てて、毎朝二分でも三分でもご先祖様にお参りすることです。」とも言われました。

私たちの生命は、仏さまご先祖さまからいただいた尊い生命です。ご先祖さまへの報恩感謝の日暮しなのであります。

ところでご仏壇の中にはご先祖さまのお位牌が祀られています。位牌の裏には俗名と享年が記入されています。

享年とは「天から享（ウ）けた年数」という意味で、この世に存在した年数のことです。また行年とは「修行した年数」つまり、私たちはこの世、娑婆世界に修行に来た年数、という意味であります。

享年（行年）は、数え年で記されています。数え年の計算法は、生れた年を一歳とし、以後正月毎に一歳ずつ加えて数える年齢です。役所関係では満年齢を使えますが、仏教ではなぜ数え年なのでしょうか。

答えは、人間は母の胎内に一〇ケ月いて生れるのですから、その一〇ケ月と誕生日過ぎの数ヶ月を加えるからです。つまり、オギャと生れて人間誕生ではなく、すでに母の胎内に宿ったことで人間誕生としているからであります。

数え年で計算する日本の行事は、喜寿や米寿などのお祝いなどもそうですね。

閻魔帳

私たち人間は、生前の行なったことをあの世で裁かれることになるようであります。裁く裁判官は一〇人おって、なかでも代表される王は、閻魔王であります。

亡くなられて七日目ごとに審査され、最初の七日目を初七日と言い、二回目の七日目が二七日（ふたなのか）、三七日（みなのか）・・・五回目の七日目（５×７＝３５）、三五日目の裁判官が、閻魔王であります。

閻魔王は、その人が生前行なったことを記録した帳簿を持っており、また、その人の生前の行動を即座に映し出す鏡も使って審査するようです。閻魔王が持っている記録簿が「閻魔帳」であり、行動を映し出す鏡を「浄玻璃（じょうはり）の鏡」といいます。この浄玻璃の鏡は、この世で申せばビデオテープ・ＤＶＤのようなものでしょう。

学校などで先生がもつ生徒の成績や行動記録を記したものを俗に閻魔帳というように使われます。

経典の中で、諸々の悪事は露塵（つゆちり）ほども作らず、諸々の善事は海山（うみやま）ほども行なおうとする努力こそが大切だと教えてくれています。

悪に対して恐ろしい様相をする閻魔王は、実はお地蔵さまの化身なのだそうですよ。

寺院に掲げられている「地獄極楽絵図（十王図）」からお話をしました。

幕末から明治維新への絵巻、日本の夜明け、黒羽の目覚め

新江　彰

「外様にて奉行なすの（那須野）は珍しく横綱を張る肥後の大関」。

当時、江戸の庶民は増裕公をこのように見ていたようである。

幕府の慣例・前例からいって、外様大名が奉行につくことはあり得なかったが、外様大名黒羽藩主大関増裕が陸軍奉行、海軍奉行につき、さらには若年寄まで昇進したことは驚きであり、話題になったことだろう（県立博物館、平成十六年度・秋季企画展図録「幕末の陸海軍を率いた黒羽藩主、大関増裕」による）。

とにかく、増裕公は幕府の重臣として江戸で活躍した黒羽藩第三十一代の殿様であった。

それが慶応三年（一八六七）師走の十二月九日、金丸で狩猟中に急死した。満三十才の誕生日を迎えた日の出来事である。

夢想だもしていなかった藩主増裕公の突然の死により、御殿の中は上を下への大騒動になったであろうことが想像されるが訣あって表向きは増裕公病気ということにして黒羽藩の後継藩主を決める相談に入っていた模様である。

慶応四年（一八六八）、年が明けたばかりの一月三日、戊辰戦争が勃発した。黒羽藩では藩主不在のまま一月十七日には大雄寺と帰一寺に農兵等が集められ内城において四百人規模の大調練（大演習）が実施されたという。この年三月十一日黒羽藩は官軍として会津征討を命じられ、五月二十二日には奥州にも出陣し討幕に幾多の功績を上げた。

その間、黒羽藩では慶応四年（一八六八）四月二十七日、新政府により増勤の大関家家督継承が認められ、増勤は黒羽藩第三十二代藩主となった。

他方、黒羽藩兵は会津藩を討つために舘林藩、紀州藩、肥前藩等と共に白川（河）口へ出兵。白坂、棚倉、三春、本宮と兵を進め二本松で善戦の後、転戦して那須ケ岳を越え三斗小屋を経て田島、会津へと死を決して進軍した。この戦いの様子を藩兵輜重方として出兵した小生の曽祖父新江七郎兵衛は七十八才の時、黒羽藩旧臣の小林嘉平翁に以下の如く述懐している。

「八月二十三日、北湯本にて四小隊を二分し一隊は大丸塚を越え、不意に賊の背後に出て号鉋を奪い、三斗小屋への通路を遮断、他の一隊は那須湯本等の賊を一掃して那須ケ岳を越え三斗小屋へ進む。この行路、常に鎖を設け通行人が這って通る難所である。故に行軍甚だ困難を窮めた。大丸越えの兵は無路絶険を押し進むため、進軍がはかどらず遅れる。那須ケ岳超えの兵が先ず進み大・小砲を放つ。しかし兵が少ないので包囲されるのを恐れ、山岳に散兵をしき必死に戦う。弾丸盡きようとしたとき大丸越えの兵が到着して賊の背後から激励奮戦する。賊、うろたえ遂に大砲、輜重を捨て隊をくずしてちりじりになって山間を越えて走る。大沢村の三小隊、内二小隊は舘林藩、黒羽は一番小隊、大砲二門、輜重を率いて小谷村に至る。同所民家に賊兵一小隊程屯集していたが、我が一番小隊長益子四郎曰く、『当所は皆賊に通ずる人民なるを以って一小隊の兵を配置すべからず。賊兵は僅に拾名を越えてはいない。その余りは領内の人民にして猟師等の集合ならん。とすれば農を銃殺することは黒羽藩兵の望まざるところなり、故に彼ら農民必ずや銃声を聞く時、逃走するのは必然である。就いては賊の陣屋の背後に出て、その家屋に発砲すれば敵はうろたえ、ちりじりになる。本隊は家屋の前に散乱する賊兵を目がけて銃殺すれば農民は逃れて賊のみを殺すことを得る。』軍監安藤小太郎もこの説を賛す。黒羽一番小隊、舘林二小隊、合せて三小隊輜重を護り小谷村に入る・・・・・・。」

以上は戊辰戦争の極く一部の記述にすぎない。戊辰戦争で黒羽藩兵二十余名と軍夫十数名が戦死。明治二年（一八六九）六月幕府軍の榎本武揚等が箱（函）舘で降伏して戊辰戦争は終結し新しい日本の歩みが始まった。

戦争が終って黒羽藩は大雄寺に藩兵を招集し解散式を挙行。その時、記念として配られた大関家の家紋「柊囲沢瀉（ヒイラギカコミオモダカ、通称ガンギマルニオモダカ）」の入った朱塗りの木盃が、今も静かな輝きをみせる。

偉人・大関増裕公にスポットを当てた平成十六年十月三日に始まった栃木県立博物館の秋季企画展「幕末の陸海軍を率いた黒羽藩主大関増裕展」は、今の私共にまたとない歴史認識と不足している「温故知新」の心を再び蘇らせてくれたのである。

参考文献―「黒羽藩・戊辰戦史資料」「ふるさと雑記」「県立博物館・平成十六年度・秋季企画展『幕末の陸海軍を率いた黒羽藩主、大関増裕』図録」

海軍奉行　大関　増裕
慶応元年（一八六五）冬　撮影

禅堂・本堂西面及び廻廊一部屋根カヤ補修工事

かや葺き屋根の補修（差しガヤ）は、十年ごとに行わなければならないとされている。そして、葺き替えは一代に一回（三十年に一回）と言われている。

禅堂は平成七年、本堂は平成十年（西面は日陰で風通しが悪いため早く痛む）に葺き替え工事を行ったが、今回痛みが出てきたため差しガヤ方法の補修工事を実施した。廻廊一部の補修は、屋外東司新築により廻廊からの東司入り口新設のため行った。

工事進行状況をお知らせします。

① 禅堂正面桁補修工事

② 禅堂正面カヤ補修工事

③ 禅堂カヤ補修完成

④本堂西側カヤ補修工事

⑤ 廻廊カヤ補修工事(左の建物が東司)

完成
「平成十六年十月三十日」

屋外トイレ「東司」建設と上下水道工事の記録

平成十六年一月二十九日～平成十六年九月二十三日

曹洞宗寺院では、禅堂・東司・浴司は三黙道場といい、重要な修行道場であります。このたび、檀信徒や一般参拝者そして、障害者の方にも対応できる屋外トイレ「東司」を新設することとなりました。

建設工事は、平成十六年一月二十九日から着手し四月二十日完成しました。下水管接続のための町下水道工事は七月四日から八月十日までで終了しました。屋外トイレ「東司」の使用は、九月二十三日彼岸の中日から開始しました。

墓参の方や参拝者にたいへん喜ばれています。

① 地鎮式「1/29」

② 基礎工事「2/6」

③ ステコン「2/10」

④ 鉄筋組み「2/26」

⑤ 型枠「3/2」

⑥ 型枠外し「3/10」

⑦ 配管工事「3/10」

⑧ 屋根工事「3/10」

⑨ 屋根瓦葺き「3/15」

⑩ 内装工事「4/5」

完成「4/20」

障害者用

女子用

男子用

上下水道工事

① 上下水道工事

② 山道上下水道工事

③ 山道上下水道工事

大雄寺の仏像

本尊（釈迦如来坐像）県文化財指定

経蔵（聖観音立像）県文化財指定

禅堂（宝冠釈迦）県文化財指定

経蔵内（左・傳大士、中央・聖観音立像）

平成十七年の予定

①大雄寺案内本「大雄寺　諸堂拝観」発行
②ぼたんコンサート開催（琵琶演奏）

平成十七年の行事

一月一日より	初詣
一月三十日	節分会
三月十七日～二十三日	春彼岸会
五月一日より	牡丹開花
五月八日	花まつり
五月八日	コンサート開催
六月八日	大般若法会
八月十三日～十六日	盂蘭盆会
九月二十日～二十六日	秋彼岸会
十月一日	大施食会
十二月十八日	観音祈願法会
十二月三十一日	除夜法会

大雄寺で開催している講座 参加してみませんか！

●日曜坐禅会
毎月第２と第４日曜日　午前７時30分～９時まで
坐禅・作務・茶話　初めての方歓迎

●ご詠歌教室
毎月第２と第４水曜日　午後１時30分～４時まで
矢板市　瑞雲院住職様が優しく教えていただけます。

●婦人読経会
毎月第１火曜日　午前８時30分～９時30分まで
読経・法話・茶話

●写経の会
毎月第１火曜日　午後２時～４時まで
静寂の中経文を写す行です。気軽にご参加できます。

●石仏教室
毎月７の付く日（７日・17日・27日）

※ 詳しくは大雄寺にお問い合わせ下さい。

大雄寺ホームページ

詳細説明、一口法話、お知らせページ、掲示板など掲載
URL　http://www.daiouji.or.jp/
E-mail　ryoyu@daiouji.or.jp